らき☆すた～変わる日常、陵桜学園桜藤祭編～

ガイアード

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

旋律達といつもの日常を過ごしていた俺だったが、その日の夜、俺は不思議な夢を見る。

そして、その夢こそが、俺を別の世界へと誘うきっかけとなるのだった。

その世界で起きる、旋律達の危機。

俺はその世界で旋律達を救うべく、たった一人で奮闘を開始する事になる。

これは、俺の身に起きた、そんな非日常のお話。

目　次

始まりの前奏曲その1 ―――― 1
始まりの前奏曲その2 ―――― 10
動き出す旋律達～旋律との邂逅と胎動～ ―――― 19
旋律達の邂逅、そして、この世界と俺の謎 ―――― 36
旋律のもう1つの邂逅そして、つける心の決着 ―――― 55

始まりの前奏曲その1

俺はこの世界に1人だった。
ある日、突然変わった俺の周りの世界。
そして、この世界には俺の知り合いは、俺の本当の両親と義理の両親のみ。
それ以外の人間は皆、俺の事を全く知らなかった。
覚えていない、というのではない。
最初から、俺という人間はこの世界では存在してはいたが、この世界の旋律達との関係はなかったのだ。
皆はいわば、鏡に映ったもう1人の自分。
そして、俺はこの世界に紛れ込んできたイレギュラーであり、この世界では旋律達とのつながりを持たない人間だった。
俺はそんな世界でこれから、俺の知っている旋律達にそっくりな、中身の違うもう1つの旋律達を助けなければならなくなった。
何故こんな事になってしまったのか、それは、今日というスタートを迎える前の日の晩に見た夢が、原因だった。

前日の晩・・・・・・・

（・・・なんだ?あれは・・・やまと?なんだ?何を言ってる・・・。）

俺はこの日、俺の夢の中でやまとと出会った。

だが、夢に出てきたやまとはいつも俺が見ていた、俺が知っていたやまととは様子が違っていた。

（・・・森村、慶一さん、ですね?あなたにお話したい事があります。）

やまとは俺に、なんだか他人行儀な態度で話し掛けてきた。

俺は、そんなやまとに違和感を感じたので

（なんだよ?ずいぶん他人行儀だな?それに口調もなんか少し違ってないか?）

そう尋ねると、やまとはコクリと頷いて

（・・・ええ、そうです。何故なら、この姿はあなたの記憶の中にいる人物の１人を借りたもの・・・そして、あなたとこうして話す為には、この方が良いと判断したためです。）

訳のわからない事を言うやまとに俺は、少し混乱しつつ

（どういう事だ?お前はやまとじゃない、って言うのか?）

そう尋ねると、やまとは俺の言った事を肯定するように首を縦に振ると

（はい。姿形はあなたが言う永森やまとさんのものですが、私自身は違います。私の正体についてはいずれわかる時もくるでしょう。それよりも、今はあなたとどうしてもお

話をしなくてはいけないのです。）

姿形？正体？よくわからない単語に更に困惑しつつもとりあえず頷くと

（なんだかよくわからないが、まあ、夢だしな・・・いいぜ？聞いてやるよ。）

そう言いつつ、これは夢なんだし、と自分を納得させて、俺は先を促した。

やまとの姿をした誰か？はそんな俺の言葉に頷くと

（ありがとうございます。実は、この世界によく似たパラレルワールドが存在するのですが、そこでは今、大変な事が起きているのです。）

その言葉に俺は（大変な事？）と聞き返すと、やまとの姿をした誰か？はコクリと頷いて

（ええ。とにかく、事情を説明して行きます。その世界は、今のあなたがいる世界とはほぼそっくりなのです。そして、あなたが知る人達もまた、その世界には存在しているのですが、〝あなた〟はその世界で存在はしていますが、あなたの知る人達とのつながりを持ちません。それゆえに、その世界ではあなたを知る人間は、その世界に存在するあなたの御両親と貴方の実家にあたる龍神家以外にはいません。）

そこまで話して一端呼吸を整え、更に先を進めるやまとの姿をした誰か。

（そこの世界の人達も、あなた方同様に同じ学校へと通い、生活をしています。そして、私の言う事件は、時間的にはあなたの通う学校の学園祭の開催日に発生します。）

その言葉に俺は首を傾げつつ（学園祭、つまり、桜藤祭か？）と聞き返すと、やまとの姿をした誰かはコクリと頷いた。

それを見て、俺はどんな事件が起きるのかを聞こうと思い、話の先を促す。

（・・・とりあえず続きを話してくれ。）

そう言うと、やまとの姿をした誰かはコクリと頷き、話の続きを始める。

（私には仲間がいます。そして、その仲間は私が言うその世界に偶然訪れました。そして、そこで予期せぬ事故に巻き込まれる事となったのです。そして、その事故の影響は、あの学校とその周辺の広範囲を壊滅的な状況に追い込むものでした。ですが、私の仲間はそうなる前にある対処を施し、一応の壊滅の危機を脱しました。ですが、その為に、あの範囲一帯は桜藤祭開催の当日よりも先の時間へと進めず、当日が来たら、再び一定の時間まで時間が巻き戻される事となりました。この状況を脱する為には事故の起きた原因を取り除くしか対処の方法は望めない、それが今のその世界の現状です。）

そこまでの説明を聞いて、俺は顎に手を当ててその話を聞いていたが、やまとの姿をした誰かに

（なるほどね・・・。でも、その話が本当だとして、その世界に於いてその原因を取り除く事の出来る者の存在ってのはなかったのか？そんな世界でも必ず、そう言う人間ては出て来そうなもんだけどな？そこに本人の自覚のあるなしはあってもさ？）

そう言って、ふと心に浮かんだ疑問をぶつけてみたが、その問いにやまとの姿をした誰かはため息を1つついて

（・・・そうですね、あなたの言う通り、そう言う人は存在していました。しかし、その人物に予期せぬトラブルがあり、その人物はこの問題の解決に係われなくなってしまいました。）

そこで一端言葉を切り、更に続きを話す。

（私達も色々とこの状況を打開する手立てを考えましたが、仲間同士で問題を解決するにはどうすればいいか話し合った結果、その世界か、それ以外の平行世界に住む誰かの手を借りて、この状況を打開するしかない、という結論に至ったのです。私達はその後、その世界と数ある平行世界へのアクセスとその平行世界に住む協力してくれそうな人物にコンタクトを試みました。しかし、そのほとんどは失敗に終わり、解決の為の手立てを諦めかけていた所だったのですが、その時にあなたとのコンタクトが取れたので、こうしてあなたに話をしにきたのです。）

俺はその言葉に少しの間考え込んでいたが、やまとの姿をした誰かの方へ顔を向けると

（話はわかった。でも、どうして俺なんだ？）

そう疑問をぶつけると、やまとの姿をした誰かはふっと目を伏せ、そして、俺に顔を

向けてそっと瞳を開き
（・・・あなたがこの世界であの子達とかなり強い絆で結ばれている人であるから、そんなあなたならば、こちらの世界でもあの子達の力になってくれるだろうと思えたから、ですね。あなたならきっと、あの子達を見捨てる事はしないのではないか、そう思ったのです。）
　そう言われて、俺は照れつつ
（え？あ、まあ、それはそうかもしれないけど・・・そう改めて言われると、照れるかな・・・。けどさ、俺に何が出来る？話を聞く所では結構途方もない。そんな大事の解決が俺に出来るのか？）
　俺のその言葉に、薄い微笑みを向けつつ頷くやまとの姿をした誰か。
（・・・確かに話は大事かもしれません。しかし、あなたのすべき事は、その世界で起きる事故の原因を取り除く事だけでいいのです。そして、それはあなたの力でも十分になし得るものです。ですから、あなたはその原因を見つける為に行動して下さい。）
　その言葉に俺はとりあえず頷いて
（わかったよ。俺のすべき事はさ〈どうせ夢なんだし、話に乗るのも面白いか〉）
　そう言いつつ、心の中ではそう考えていた。
　そんな俺の、心の中の言葉には気付いていないっぽいやまとの姿をした誰かは、更

に俺にいくつかの注意事項等を伝えてきた。
（・・ありがとうございます。ご理解いただけて助かりました。それと、私からいくつかの注意事項等がありますので、それを伝えます。）
　その言葉に俺もとりあえず頷くと、やまとの姿をした誰かは更に話の先を進めた。
（まず、あなたは向こうの世界に於いては転校生という事になっています。家の場所は変わっていはいませんが、その部分が少し違います。そして、向こうの世界では、あなたはあの子達の事を知ってはいますが、向こうはあなたの事を知りません。その辺りを踏まえてのコミニュケーションを心がけていただければ、と思います。そして、その世界でのループの終わりは桜藤祭の当日、そして、始まりはあなたが転校する日となります。おそらく、事故の原因が判明せず、問題が解決しない場合はその間を行き来する事になるでしょう。）
　そこまでの説明を受けて俺も頷きで答えると、それを見て、更に話の先を進めて行く。
（そして、向こうには私の仲間がいます。その仲間は誰かの肉体を借りて、その世界に存在しています。ですが、もし、仲間を見つけたとしても、コンタクトを取るのはかなり難しいかもしれません。何故なら、私達が変えようとしている時の流れを修復する為に、本来流れている時が、その修復の邪魔をしようとして、影響を及ぼしてくるからです。その為に仲間もあなたには大してヒントになるような情報も与えられないでしょ

う。ギリギリの所は伝えられるかもしれませんが、時の影響がどんな作用を及ぼすか分からない以上、本当に大事な事は伝えてはもらえないかもしれません。本当に厳しい事になりますが、そこはあなたに奮闘してもらう以外にはないでしょう。）

そこまで聞いて、俺は更に疑問に思った事があったので、それを聞いてみた。

（ん?･もし、あんたが言ったとおりだとして、俺は今、かなり重要な情報を聞いている訳だが、それを聞く事で時間とやらが影響を及ぼしてこないのか?）

そう尋ねてみると、やまとの姿をした誰かは頷いて

（･･･はい。確かに同じ世界にいる人間に話すと、時は邪魔をしてくるでしょう。ですが、それはあくまでのその世界の時がその世界にのみ影響を及ぼすのです。そこで、私達は、その世界の時以外の場所から協力者を選んだのです。流石に時も、別の世界の時には影響を及ぼせない。だからこそ、私達はあなたにある程度の情報を伝えられたのです。と、これがあなたに伝えられる情報となります。最後に１つ忠告があります。）

そう言って一端言葉を切り、やまとの姿をした誰かは一呼吸おいて、話し始める。

（･･･あの世界に於いて、あなたとあの子達と仲良くもなれると思います。あなたの事を知らないというだけで、性格や特徴もあなたのいる世界の子達とは何ら変わりはありませんから。ですが、問題が解決を見たとき、あなたはあの世界から消えてしまう。それはあなたにとってもつらい事になるかもしれません。その事だけは覚悟していて下

さい。突然に現れて、こんな事をあなたに押し付けてしまう事を大変申し訳なく思っていますが、どうか、お願いです。私の仲間を、そして、私の仲間の行っているあの世界の子達を助けてあげてください。どうか・・・よろしく・・・おねが・・・い・・・しま・・・す・・・・・・）

やまとの姿をした誰かは最後にそう言って、俺の夢の中から消えていった。

そして、その数分後、俺は目を覚ましたのだが、俺は何故か夢の内容をはっきりと覚えていて、更にはこの目覚めた瞬間から、俺の周りの世界は大きな変化をしていたのだった。

始まりの前奏曲その２

昨日の奇妙な夢を見た翌日、俺はいつも通りの時間に目を覚ますと、顔を洗いに部屋を出た。

そして、顔を洗いながら昨日の夢の事を考えたのだが、不思議な事に、昨日見た夢で語った事、語られた事の１字１句を忘れてはいなかった。

普通であるならば、余程印象深い夢でない限りは、大概の夢の内容を忘れてしまうものなのだが、俺は、この奇妙な感覚に戸惑いを覚えた。

（パラレルワールド？危機を救う？俺が？夢だよな・・・夢のはず・・・でも、それにしちゃ、どうしてこうもはっきりとあの夢の内容を覚えているんだ？確かに設定は面白そうな感じだったが、所詮は夢だろ？現実にそんな事が起きるはずもない・・・ま、考えても仕方ないか・・・。）

と、心の中でそこまで考えると、俺は学校に行く準備を整えて朝食の準備をしようとしたのだが、その時に異変に気付いた。

それは、すでに使い込まれているはずの教科書が、何故か真新しかったのだ。

俺がこの教科書をもらってから大分たつはずなのに、俺が手にとり、鞄に詰め込んだ

教科書は、もらいたてのほやほやだったのだ。
俺は、この奇妙な出来事に首を捻りつつも、とりあえず学校へ向かう準備を済ませ、キッチンへと降りて行った。
すでに先程の教科書から、俺の周りの世界は変化してしまっている事に気付きもしないままに、俺はキッチンへと辿り付く。
そして、キッチンに入った時、そこには2人の人間がいた。
その2人は、俺に気付くと、挨拶をしてきた。
「おはよう、慶一。相変わらず早いのね?朝御飯、もう少しで出来るから、座って待ってなさいね?」
「おはよう、慶一。ん?どうした?ボーゼンとこっちを見て。父さんと母さんの顔になにかついてるか?」
その言葉、そして、その姿を見た俺は思わず絶句してしまっていた。
何故なら、そこにいた2人は、仏壇に飾られているはずの写真の2人。
そう、俺の本当の両親である、森村慶子、そして、真一の2人だったからだ。
この世には存在しないはずの2人。
「・・・ど・・・どうして・・・2人が・・・ここに・・・?」
思わず搾り出すようにそう言う俺に、2人は頭にハテナマークを飛ばして

「どうして、って・・・ここは私達の住んでる家じゃないの？何を当然な事を言ってるのよ？」
「慶一？お前、体調でも悪いのか？」
　そう言う２人に俺は思わず
「っ！そうじゃない!!俺の両親はすでに亡くなってるはず!!その人間がここにいる事事態がおかしい、って言ってるんだ!!」
　そう声を荒げたのだが、そんな俺に２人はやれやれと首を振って
「亡くなった、って慶一、あなた、おかしな夢でも見たの？」
「だったら、今ここにいる僕達はなんなんだ？慶一、どういうつもりかは知らないが、笑えない冗談は勘弁だぞ？」
　そんな風に言って来る２人に俺は、なおも納得が行かずに反論しようと口を開こうとした。
「っ!!だから！そういう事じゃなくってっ!!（森村さん・・・）ん？」
　だが、途中まで言いかけた時、俺の頭の中に語りかけてくる声に気付き、俺は思わず
「・・・何だ？この声、どこから・・・。」
　そこまで言いかけた時、俺の頭にさらにはっきりとした声が響いてきた。
（私です。昨日の夢に出て来た者です。少しの間だけですが、あなたにアドバイスをす

る為に話し掛けています。そして、私に答える際には頭の中で言葉を発するようにして下さい。そうする事で話す事が出来ます。）

頭の中でそう言われ、俺は両親が奇異なものを見るような顔でこちらを見つめる中、俺は声に従い、話をした。

（・・・おい、なんだよ、これ?どうなってるんだ。あれは夢じゃなかったのか?）

そう尋ねると、声の主は

（そう思い込んでいたのですね?残念ですが、昨日の事は夢ではありません。そして、すでにあなたは私が送り届けたパラレルワールドへと来ているのです。そして、目の前にいるあなたの御両親は紛れもなく本物です。ただし、この世界に於いて、なのですが・・・。そして、あなたの世界では亡くなっている何人かの人もこの世界では健在です。ただ、泉こなたさんの母親のみがこの世界でも亡くなっている、その部分には変化はありません。）

そう説明してくれたの聞いて、俺は驚きつつ

（え?そ、それじゃ、俺は本当にこの世界に来ちゃったのか?そして、あんたの言う事が本当なら、まさか、瞬やしおんも・・・。）

そう尋ねると、声の主は

（その通りです。彼らもまた、この世界では健在です。しかし、あなたとの接点はない、

この部分が違いです。）

その答えに俺は思わず涙ぐみそうになりつつ

（・・・そうか・・・この世界ではあいつらはちゃんと・・・俺の世界ではすでにいない人間達だったから、不幸に巻き込まれた人間達だから、健在というのであれば嬉しいかな・・・少し複雑だがな・・・。ともあれ、俺に声をかけてきたという事は、何かある、って言う事だよな？）

元の世界では亡くなってる人間の何人かが健在である事に複雑ではあったが、とりあえず喜びつつも俺は、声の主にそう尋ねると、声の主は俺に

（そうです。とりあえず今のあなたは、ちゃんとあなたの御両親が健在である世界に来ています。あなたにとっては辛く、やりにくい事かもしれませんが、出来る限り親子として振舞って下さい。出来るだけ不自然にならないように。そして、今日から始まって行きます。とても困難な事ではありますが、今の私達にはあなたに頼る他ありません。どうか、どうかよろしくお願いします。）

その言葉に俺は、複雑な思いを持ちつつも気になった事があるので、それを尋ねてみる。

（・・・わかったよ。何とかやってみる。それと、１つ気になったんだが、俺がこの世界に来てしまったという事は、元の世界の俺はどうなるんだ？）

　その質問に、声の主は
（そちらの方はご心配なく。私の仲間が向こうで特殊なシステムを使い、向こうにいるあなたの関係者達にはあなたがいなくなっている事がわからないようにしてあります。そして、時間のループがどれだけ繰り返されたとしても、向こうでは時間はほとんど経ちませんので、長い間帰ってはこれない、という事はありません。そして、あなた自身もまた、こちらで施しているシステムの影響で、どれだけ時間のループが繰り返されても年をとる事もないのです。）
　という説明を聞いて、俺は少しほっとすると共に、改めて自分の使命という奴について思いを巡らせる。
（なるほど、良く分かったよ。とりあえずは、この世界で起きる事を何とかしないと、俺は元の世界には帰れないんだな？）
　そう言うと、声の主は
（・・・そうなります。私には、申し訳ないのですが、あなたに頑張って欲しいとしか言う事はできません。そして、こうやって会話が出来るのも、後1日か2日、というところでしょう。それ以降はこちらもあなたへの干渉は出来なくなると思います。その後は、あなたのやり方と判断に委ねる事となるでしょう。）
　その言葉に俺は、不安を残しつつも

（・・・了解した。やれるだけの事はやってみる。ただ、あまり期待はしないでくれよ？俺も確実な事なんて何一つ言えないんだしさ。）

そう答えると、声の主は

（わかっています。とにかく、今後のコミニュケには注意してください。それではまた、必要な時にあなたとコンタクトをとる事になると思いますが、それまでは、あなたの奮闘を期待しています。）

そう結ぶ声の主の言葉に、俺はこの先の行動について考えていた。

が、２人には聞こえない声との対話をしている俺を、不安そうな目で見つめていた俺の両親は

「・・・慶一。具合が悪いのなら、転校は明日からにする？」

「それがいいかもしれないね。母さん、学校に転校を１日ずらしてもらうように電話を・・・。」

母さんがそう言い、父さんがそう言いかけた所で俺は慌てながら

「ちょ！待ってよ!! 大丈夫、なんでもないから！ちゃんと今日から学校行くから!! ちょっと昨日の夢見がおかしかったから勘違いしてただけだって!!」

と、言い訳をしつつ、２人をなだめると、２人はそんな俺を見て

「そう？それならいいけど、とにかく、御飯は早く食べなさい。もう時間も大分押し迫っ

てるはずよ?」
「そうだな。慶一、初日から遅刻だけはしないようにね。」
そう言う2人に俺は、苦笑しながらも頷いて
「分かってるよ。それじゃ、えと・・・いただきます。」
少しだけ、俺の世界では絶対に味わう事のできない、俺の本当の両親の作った料理を目の前にして、複雑な思いを感じつつも、今だけはそれを味わうのもいいだろうと考えた俺は、早速料理に箸をつけた。
そして、俺はその料理の味を心に焼き付けようと、ゆっくりと味わって食べた。
料理はとても美味しくて、俺は思わず涙が出そうになるのを何とかこらえながら朝食を終えた。
「・・・ごちそうさま。それじゃ、行って来ます。」
泣きそうになっている自分の顔を見られないように素早く食器を片付けて俺は、足早にキッチンを後にしたが、その時に、そんな俺の態度に頭にハテナマークを飛ばしている両親の姿を一瞬だけ見つつ、玄関へと向かう。
その際に母さんは俺に
「行ってらっしゃい。気をつけて行くのよ?」
そう声をかけてくれたのを受けて、俺はそんな母さんに振り返らず、そのままで

「わかってるよ。それじゃ母さん、夕食も期待してるから。」

そう告げて、俺は玄関を出た。

玄関の外の町並みは、俺が元の世界で見ていた風景と何も変わらなかったが、確実にここが元の世界とは違う世界なのだという確信だけは何故か持つ事ができた。

これから向かう学校で起きる事故。

今の俺にはその原因がなんなのか、皆目見当もつかなかったが、今確実に、俺は戦いへの第１歩を踏み出した。

動き出す旋律達～旋律との邂逅と胎動～

こちらの世界に来て突然の、本当の両親との邂逅。

そして、初めて味わう本当の母親が作ってくれた料理を食べて俺は、学校へと行く為に家をでた。

この世界で俺のやるべき事、その事に色々と考えを巡らせる俺だったが、かなりそちらへの考え事に没頭してしまっていたらしい。

俺の横から走ってくる人影に俺は、気付く事が出来なかった。

「ちょっとー!?どいてー!どいてー!!」

と言う大声に気付いて、声のした方へと視線を向けた時にはもう遅かった。

ドン!という音と共に、その声の主は俺にぶつかって来て、俺もまた、突然飛び出して来た人影に反応ができずに、もろに衝突する事となった。

そして、俺にぶつかった人をよく見てみると、それは俺のよく知るあの子だった。

「あいたたた・・・こっちはちゃんと声かけたのに気付いてないのー?おかげで尻餅ついちゃったよ。とはいえ、これはなんかフラグでも立ちそうかな?」

と、俺にぶつかって弾き飛ばされて尻餅をついたあの子は、俺を見てそう言う。

そんなあの子に俺は、思わず名前を呼んで声をかけそうになった。
「ごめんごめん、ちょっと考え事をしててさ。それよりも、怪我はないか？こ・・・!?あ、いやなんでもない・・・。」
その子を立たせようと手を差し伸べつつ、名前を言いかけて俺は、今目の前にいる子が俺の知るあの子とは違う事を思い出して、思わず呼びそうになった名前を飲み込んでこらえた。
俺に手を差し伸べられたその子は、俺の手に捕まって立ち上がると、何かを言いかけた俺の顔をじっと見つめて頭にハテナマークを飛ばしているようだったが、気を取り直すと
「あー・・・えっと、とりあえず起こしてくれてありがとう。うん大丈夫。尻餅はついたけど、大した事ないよ？それより、君、見ない顔だよね？でも、その制服を見ると、どうやらうちの生徒みたいだけど？」
そう言ってくるあの子に俺は内心、複雑な思いを感じつつも頷いて
「あ、ああ。そうなんだ。今日から陵桜学園に転校する事になってね。登校途中だったんだけど、そこに君がぶつかって来たってとこ。」
そう言うと、その子も苦笑しつつ
「あ、あはは。私も急いでたからねー。まあ、お互いにたいした事はなかったんだし、こ

の話はもうおしまいにしようよ。あ!!」

突然声を上げるその子に俺は「どうしたの？」と声をかけるとその子は大慌てで「私、急いでたのを思い出した!!君も急いだ方がいいよー？もうすぐ予鈴なるし。それじゃね。私先に行くからー！縁があったらまた会おうねー!!」

そう言って慌てて走り出すその子に俺は、勢いに圧倒されつつ見送ってそして、同時に、俺を知らないその子との会話に凹む俺だった。

（はあ・・・あらかじめ教えられていたからまだショックは小さいけど、これがなにも知らない状況であんな事言われてたらきっとショックで立ち直れなかったかもだな・・・でも、こっちでも相変わらずなんだな・・・こなた・・・。）

と、心の中で今会ったこっちの世界の泉こなたの事を思い出していたが、こなたの〝遅刻〟という言葉を思い出した俺は、慌てて走り出したのだった。

（やばい！こなたが急いでるのを見て、俺は何してたんだ！こなたがあれだけ焦ってるって事は相当やばいって事じゃないか！転校初日から遅刻なんて洒落にならないぞ!?急げー!!）

そう考えつつ、全力でダッシュする俺だった。

そして、予鈴が鳴る頃、俺は何とか遅刻ぎりぎりで学校へとたどり着けた。

学校内部も俺の元いた世界とは何ら変わらなかったので、スムーズに職員室へと向か

う事ができた。
　俺は職員室の前で軽く深呼吸してからドアをノックして「失礼します。」と声をかけて、職員室内へと足を踏み入れる。
　そして、職員室内で
「おはようございます。今日から陵桜学園に転校してきた森村慶一です。えっと、クラスの担当の先生は居ますか?」
　そう声をかけると、俺の声に視線を向ける教師達だったが、そこに俺に声をかけてくる教師がいた。
「おー。今日から来る転校生の1人はお前か。こっちに来い、私がお前のクラスの担任の黒井や、よろしくなー。」
　そう言って声をかけてきたのは、元の世界でも俺のクラスの担任になっている黒井先生だった。
　俺は、黒井先生を見ながら心の中で
(この世界でも俺の担任は黒井先生なんだな・・・けど、なんだか本来知っている人間達にそんな風に言われるのは、それがからかいや冗談ではないと分かっていてもきついなあ・・・。ん?今日から来る転校生の1人?転校生は俺だけじゃなかったのか?うーん・・・?まあ、考えていても始まらないか・・・。)

そう考えつつ

「こちらこそよろしくお願いします。」

そう返すと、黒井先生はそんな俺の挨拶に頷いて

「おう、よろしくたのむでー。もう1人の転校生も廊下の方で待っているはずや、一緒に教室へと向かうでー。ほな、うちについて来い。」

その言葉に頷きつつも、俺は黒井先生の言っていた言葉に引っ掛かりを覚えた。

そして、また心の中で

(もう1人の転校生か・・・同じ日に2人の転校生ってかなり珍しいよなあ・・・さて、どんな奴なのかな?)

そう考えつつも黒井先生と一緒に廊下へと出た時、そこには1人の女生徒が待っていた。

だが、俺はその姿を見てかなり驚いていた。

何故ならその女生徒は、元の世界でも俺の良く知る子だっただけでなく、俺と同じ学年として、そして、転校生としてやってきていたからだった。

俺はその子を凝視して、驚愕で言葉が発せられなくなっていたが、その子は俺を一瞥すると

「・・・何?私の顔に何かついてる?」

そう、感情の篭らない目で俺にそう言うその子に俺は、はっと気付いて慌てながら
「い、いや、なんでもない。悪かったな、突然見つめたまま黙ったりして。」
そう言うと、その子はさして興味がないと言う風に
「・・・別にいいわ。特に気にしてないし。」
そう言うその子の態度を見て、何となく違和感を覚えた。
向こうの世界のやまとも、確かに言葉はかなりきつい方だったが、それでも、その言葉には感情が篭っていた。
だが、こちらの世界のやまとは姿はやまとだが、中身がなんだか別人のように思えた。
そうやって少し考え事に没頭していると、黒井先生が
「なんや?森村。永森に見とれてるんかー?言っとくけどな、うちの学校は不純異性交遊は禁止やぞ?」
そう言って来たのを聞いて俺は慌てながら
「ちょ、ちょっと!何でそうなるんですか!!俺は別にそう言うつもりはないですよ!?」
そう弁解すると、黒井先生はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべながら
「そうかー?それにしちゃ永森を見る目が妙にエロく見えたけどなー?永森、何かあったらうちに相談せえ、きっちりとけりつけたるからな?」
そう言う黒井先生にやまとは薄い微笑みを浮かべつつ

「そうね・・・。その時にはお願いするわ。」
　そう答えるやまとに俺はさらに慌てて
「お、おい!・やまと!・お前も妙な事言うなよ!?・俺は別にそんな事は・・・・・・・。」
　そこまで言いかけて、俺は、俺を怖い顔で凝視する黒井先生と、少し驚きの表情で俺を見るやまとの視線に気付いたが、その時に俺は自分が慌てるあまりに失態をやらかした事に気付いた。
「・・・森村、どういう事や?・永森の下の名前、お前なんで知っとるんや?・うちはまだお前に永森の名字だけしか教えておらんはずやぞ?」
　そう言って、やまともまた俺に
「・・・何故あなたは私の名前を知っているの?・私はあなたにちゃんと名乗った覚えはないわ。」
　その言葉に俺は心の中で（やっちまったー・・・）と頭を抱えつつも慌てながらも、とっさに言い訳をする。
「あ、いや、その・・・俺の知り合いに永森さんとよく似た子がいるんですが、その子も性格や雰囲気もそっくりだったし、名前も一緒だったから、ついその子と永森さんが重なっちゃって、ってだけなんだ。で、でも、永森さんの名前もやまと、って言うのか。いやー、知り合いと同じ名前だって言うのは驚いたなー。ははは・・・。」

と、とても苦しい言い訳をした俺だったが、黒井先生はまだ少し不審な目で俺を見て
「んー？何か怪しいなあ・・・その話、ほんまなんやろなー？」
そう言ってくる先生に俺はさらに畳み掛ける。
「本当ですって、信じて下さいよ。俺は嘘は言いませんから。」
そう言うと、まだ少し不信感を残しているようだったが、とりあえずは納得してくれたようだった。
けど、まだ1人、やまとが俺を凝視しつづけていたのだが、俺はあえてその視線に気付かないフリをした。
「あー、そや。今は学園祭の準備期間中でもあるから、お前らも協力してくれなー。とはいっても強制参加やけどな。とにかく、頑張って協力したってやー。」
その言葉に俺は頷きつつ
「わかりました。出来る限り頑張ります。」
そう返すと、黒井先生は豪快に笑いながら
「おー。いい返事や。とにかく期待しとるで？頑張ってやー。後、永森もな。」
俺にそう言った後、やまとに話を振ると、やまとは面倒くさそうに
「・・・はあ。」
と、なんだかやる気のないため息をついていたのを見て、俺と黒井先生は苦笑してい

たが、やがて俺達の入るクラスに到着した。
「ほな、うちが呼んだら2人共入ってくるんやで？はーい皆、席つけやー。ＨＲ始めるでー。」
そう言いながら黒井先生は、教室内の生徒達に声をかけつつ先に教室へと入って行った。
そして、俺とやまとは廊下に取り残されたのだが、再びやまとが俺の方へと視線を向けて来ているのに気付いた俺は
「永森さん？俺に何か？」
そう声をかけてみると、俺を凝視していたやまとは僅かに表情を変化させると
「・・・そう、あなたが私の仲間が送り込んだ人って事ね？」
その言葉に俺は驚いて
「何故君がその事を？ってまさか、あの声の主の仲間って・・・。」
その俺の言葉にやまとはコクリと頷くと
「そうよ？という事は、あなたもある程度の事情は知っている、という事ね？」
その言葉に俺は頷いて
「ああ。でも、この世界で、そして、この学校で何が起きるっていうんだ？そりゃ、助けられる事があるのなら協力してもいいとは思ってはいるが・・・。」

その俺の問いにやまとは目を伏せつつ
「・・・何が起きるのか、そして、その為にあなたがなにをしなければいけないのか、その事を今の私の口からは伝える事は今はできないわ・・・。ただ一つだけ、あなたに伝えられるとしたら・・・これから学園祭の初日を迎えるまでの間に、その原因を見つけて欲しいという事と、ループする時の条件は全て共通するものがある、という事だけ・・・。それを頭の中に入れておいて欲しい・・・。」
そう言うやまとに、もう少し情報を聞き出したいと思い、声をかけようとした。
「共通する事？それって？」
そこまで声を出した時、黒井先生から俺達に声がかけられた
「おーい！お前等、入って来いやー!!」
その言葉に俺は驚いて、教室の入り口に視線を向け、やまとは
「・・・呼んでいるわ。行きましょう。」
そう言い、先に入り口のドアを開けて教室へと入って行く。
俺はその状況に、これ以上の質問は無理と判断し、軽いため息を1つついた後、やまとの後に続いて教室へと入って行った。
そして、俺達は黒井先生に促されるままに教壇の上にやまとと並んで立つ。
それを見届けた黒井先生は早速俺達の紹介を始めた。

「同じ日に転校してきた色々訳ありの２人や。皆、仲良うしたってやー。」
　その言葉に俺は慌てつつ
「ちょっと！訳ありってなんですか？変な事言わないで下さいよ!?」
　とつっこむと、黒井先生はカラカラと笑いながら
「ええやないか。早く皆と打解けるようにっていううちのサービスや。」
　その言葉に俺はため息をつきつつ呆れていたが、ふとやまとの方を見ると、特に興味なさそうにしていた。
　そして、俺達に
「とりあえず自己紹介せえ。まずは、森村からな？」
　そう言って来たので、俺は気を取り直して皆のほうへと顔を向けると
「森村慶一です。短い間ですが、どうぞよろしく。」
　そう自己紹介を済まし、そのすぐ後にやまとも
「・・・永森やまとです。よろしく。」
　そう淡々と自己紹介するやまとを見て、俺は再度軽いため息を１つついた。
「永森は窓側の一番後ろの席なー。森村は中央のあそこや。」
　とそれぞれに座る席を黒井先生が教えてくれたので、俺はそちらへと歩いていく。
　そして、その際に俺は、こなたから声をかけられる事となった。

「おーい、こっちこっちー。」
　その言葉に俺は声の方を見ると、こなたが俺を呼びつつ手を振っているのが見えたので、とりあえず側に行く。
「いやー、まさか同じクラスになると思わなかったねー。あ、私は泉こなた。えっと、森村慶一君、だったよね？これからよろしくねー？」
　そう自己紹介してくるこなたに俺は、少しだけ寂しさを覚えつつもとりあえず挨拶を返す。
「泉さんか、うん。こちらこそ、よろしく。」
　そう言うと、こなたはチッチッと指を振って
「私の事はこなたでいいよ？かたっくるしいのは苦手だしねー。その代わり君の事も名前で呼んでもいいよね？」
　そう言ってくるこなたに俺は頷いて「ああ、それでいいよ。」と答えると、こなたもにっこりと笑っていた。
　そんな俺達を見て黒井先生は
「なんや？泉と森村は初対面じゃなかったんか？」
　そう言うと、こなたが頷きつつ
「今朝ちょっと色々ありまして、それでです。」

その言葉に黒井先生は
「そかー。なら、泉、森村達と仲良うしたってや。そいつ等の事はお前に任すから。」
そう言うと、こなたは黒井先生に敬礼しつつ
「任せて下さいー。もうすでに私達は友達ですからー。」
そう言うこなたに俺は苦笑しつつ心の中で
（いつの間に友達になったやら・・・とはいえ、流石にこなたらしいな。）
そう考えつつも、俺はやまとから聞いた言葉の意味も考えつつ、自分の席についたのだった。
これからの事に頭を悩ませながら、授業を受ける俺だった。
こなたｓｉｄｅ
桜藤祭の準備も始まっている今日、私は今日も遅刻寸前の時間帯をひた走りに走っていた。
だが、今日は、いつもと違う事が起きる、その事に気付かないままに、いつものＴ字路まで疾走する。
そして、そのＴ字路に差し掛かった時、なにやらぼーっとしながら歩く一人の学生の姿が目に飛び込んで来た。
このままのスピードでは激突は避け得ないと思った私は、その学生さんに注意を促す

声をかけたのだが、結局その学生さんの反応が遅れ、私達はぶつかり合う事となった。
　これは何かのフラグかな?と考えつつ、その学生さんに文句を言おうと学生さんの顔を見たのだけど、その人は私の顔を見つめながら驚きの表情を見せつつ、私の方をじっと凝視していた。
　その学生さんは見た感じはそれなりにイケメンっぽい感じの人だったのだが、なんというか、その人のまとう雰囲気のようなものが、妙に不思議な感覚を持っていた。
　それと同時に、何故か私の顔を見つめる彼の顔が少し寂しげに見えた事が、何となくだけど、興味をそそられた。
　私は彼を見ながら心の中で
(ほー?意外とイケメンだね。でも、なんだろう?私を見る目がなんだか寂しそうにも見えるなー・・・。それに、なんだか不思議な感じのする人だね・・・。うん。ちょっとだけ興味出て来たかな?)
　そう考えた後、ふと持っていた携帯に目をやると、時間がかなり押しているようだったので、私は慌てて
「私、急いでたのを思い出した!!君も急いだ方がいいよー?もうすぐ予鈴なるし。それじゃね。私先に行くからー!縁があったらまた会おうねー!!」
　そう彼に告げると、結局名前も聞かないままに、そのまま学校へとダッシュを再開し

たのだった。
　そして、学校に着いてからは、私は教室に入ってつかさとみゆきさんに会い
「おはよー。つかさ、みゆきさん。」
　と声をかけると、２人も私に挨拶を返してくれた。
「おはよ～こなちゃん。今日はぎりぎりだったね～。」
「おはようございます、泉さん。あの、何かいい事でもありましたか？」
　というみゆきさんの指摘に私は、今朝の出会いを思い出して
「うん。ちょっとねー。それより、２人共知ってる？今日から転校生が来るらしいよ？」
　と、私がいち早く知ったであろう情報を２人に話すと、２人は
「え？そうなの？わたし全然知らなかったよ～。」
「その噂でしたら、聞いていますよ？確か２人いらっしゃるとか言う事のようですが。」
　そのみゆきさんの言葉に私は、驚きつつもすでに知られていた事に若干落ち込みつつ
「え？そうなんだー・・・。あれ？でも、２人？私が今朝あったのは男の子だったんだけど、もう１人って？」
　そうみゆきさんに尋ねてみると、みゆきさんは頬に手を当てながら
「男の方は存じませんけど、もう１人は確か女の子だったという話を聞いています。」
　その言葉に私は首を捻りつつ

「なるほど、男の子と女の子の2人って事かー・・・。でも、今朝あったあの人が同じクラスだったらいいなあ・・・。」

と呟くと、2人は私に

「そうしたら、わたし達のお友達になってくれるかな～?」

「桜藤祭の準備にも手が足りない状況ですし、お手伝いいただけたらありがたいでのですけど・・・。」

そう言う2人に私は頷きつつ

「大丈夫だよ、つかさ。きっと友達になれるって。私もあの人見た時にはそう思えたから心配ないと思うよ?それと、みゆきさん。そっちもきっと大丈夫だと思うよ。」

その言葉に2人共ほっとしたような、それでいて、少しだけ期待するようなそんな顔を見せていた。

私はそんな2人の顔を見つつ、私自身も自分でそう断言した手前、そうなって欲しいなあという期待をもちつつ、2人のうちの1人でもこのクラスに来て欲しいと思ったのだった。

そして、本鈴が鳴り、黒井先生がやってきて、いよいよHRの始まりとなり、かくして私の望みが成就される事となった。

しかも、私達のクラスには2人共がやってきたので、それには私も流石に驚いてた。

彼らの自己紹介を終えて、こちらへとやってくる彼に私は声をかけると、彼も私に気付いて近くまで来てくれたので、改めて私も自己紹介をした。

こうして出会った私達だったが、私はこれからの学校生活に少しだけわくわくしていたのだった。

私達のクラスにやってきた人の名は森村慶一君、そして、永森やまとさん。

私にとって、いや、私達にとって、彼らとの出会いが後に、大変な事態に巻き込まれていく事になる事をこの時の私達には知る由もなかった。

旋律達の邂逅、そして、この世界と俺の謎

思いがけず始まった異世界での生活。
そして、俺は、この世界では転校生としてやってきた。
初日にこなたと出会い、そして、俺をこの世界へと送った声の主の仲間らしいやまとも出会い、更には、やまとが俺と同じ学年として、俺と同じように転校をしてきた事に驚きつつ、とりあえずのクラスの人達に転校の挨拶をした。
彼ら？の言う事故の原因というものがなんなのか、今の俺には皆目見当もつかず、だったが、とりあえずは動き回れる時には校内を見回って、その原因の特定に繋がる手掛かりを探すしかないな、と心の中で考えつつ、最初のＨＲが終わってから俺はこなたと自己紹介を交わしたが、そのすぐ後に、俺も知る俺の世界では俺を知っている旋律達からの自己紹介を受ける事となったが、そこに更に２人の知り合いの顔を見る事になるとは思っていない俺だった。
「それじゃ早速私の友達も紹介するね？はいはい、つかさ、みゆきさん、こっちに来てー？」
そう言ってこなたは、つかさとみゆきの２人を俺の方へと招き寄せると、２人に自己

紹介を促したのだが、その時に俺達も気付かぬうちに、３人の生徒が教室に入って来ていた事に気付かなかった。
「え、えと・・・柊つかさです。よろしくね?」
おずおずとそう自己紹介するつかさに、俺も頷いて「うん。よろしく。」と、そう言うと、その横からつかさにいきなり声をかける女生徒にちょっと驚く俺。
「やけに短いわね、もう少し何か話したら?」
その女生徒の言葉につかさもあたふたしつつ
「え、えっと・・・双子です。そっちがおねえちゃんで私は妹です。こ、これでいいかな?」
その言葉に俺は今、声をかけてきた女生徒が、かがみである事を認識した。
そんな俺の心の動きを知らないかがみは、つかさにつっこみを入れつつ挨拶してくる。
「よくはないけど･･･まあ、いいわ。私は柊かがみ。つかさの双子の姉よ。よろしくね。」
そんな２人のやりとりに苦笑しつつも、俺はかがみに「こちらこそ、よろしく。」と言って挨拶を返したが、そんな俺達のやりとりを見ていたこなたが
「なんでかがみが自己紹介するの?･隣のクラスでしょ?」
と、かがみをからかうと、かがみは顔を真っ赤にして

「う、うっさい！手間を省いただけよ!!いいじゃない！そのくらい!!」
　そんな風に激昂するかがみに、こなたはそんなかがみをあしらいつつ
「ふふーん、うそつきー。ハブられるのが怖いかがみ萌え♪」
　そのこなたの言葉に更に慌てるかがみは「なっ!?違うわよっ!!」と反論するが、こなたはそんなかがみのつっこみもどこ吹く風で
「はいはーい、そーですねー。みゆきさん、次どうぞー。」
　そう言うと、みゆきはつかさ同様におずおずと俺の前に来て
「高良みゆきともうします。このクラスでは学級委員長も務めさせてもらっていますので、何かわからない事などおありでしたら、遠慮なく頼って下さい。」
　そう言ってにっこり笑うみゆきに俺も頷いて「ああ。その時にはよろしく頼むよ。」と返すと、みゆきも心なしかほっとしたような顔をしていた。
　俺もまた、そんな風に自己紹介してくれる3人に、胸中複雑な思いを巡らせつつ見ていたが、その時に俺が感じていた事は、この世界ではかがみは別のクラスだったんだな、という事だった。
　俺はそんな事を考えつつ、お互いに自己紹介を済ませていたのだがが、そこに更に俺達に声をかけてくる2人の生徒がいた。
「お?かがみ、こんな所にいたのか。ん?そいつ、見ない顔だな?そいつが噂の転校生か

？」

「もう、牧村君、だめよ？いきなり割って入ってみんなの邪魔したら。」

と言う声を聞いた瞬間、俺は弾かれるようにその声のした方へと顔を向ける。

そして、そこに居たのは・・・陵桜の制服を着た瞬としおんの２人だった。

俺は２人の顔を凝視して絶句する。

そんな俺の様子を不思議に思った２人は俺に

「ん？どうしたんだ？俺達の顔をじっと見つめて。俺達の顔がそんなに珍しいか？」

「なんだか鳩が豆鉄砲食らったような顔してるわね？本当に大丈夫？」

そう聞いて来る２人だったが、その言葉を聞くのが限界だった。

俺は俺の世界に居た、今は亡き親友と、彼女になったかもしれない人の姿を見て、俺の意思とは裏腹に顔が歪み、そんな顔を見せてはいけないと思いつつも自分が抑えられなくて、俺は皆が見ているのを知りながらも流れ出る涙を止められなかった。

そんな俺を見て慌てる６人は俺側に慌てて寄って来て

「ちょ！慶一君、どうしたの？大丈夫？」

「慶一くん、どこか痛いの？それとも気分悪いとか？」

「けいいちくん、どうしたの？はわわわ、どうしよう～。」

「慶一さん、ご気分が優れないようでしたら保健室に案内しますよ？」

「おいおい、一体どうなってんだ？何でこいつ急に泣き出したんだ？大丈夫かよ、お前。」
「うーん・・・本当にどうなってるのかしらね？森村くんだっけ？大丈夫？」
　そう言う皆の、かたや心配してくれるような言葉を、かたや少し呆れ気味に言う言葉を聞きつつ、俺は
「だ、大丈夫。なんでもない・・・なんでもないから・・・ごめん、瞬、しおん、俺は平気だから・・・。」
　と言ったのだが、俺はこの時あまりにも気が動転していた為に、言ってはならない言葉を発した事に気付いていなかった。
　そして、ちょっと落ち着いた俺は、涙を拭ってから皆の方へと顔を向けたのだが、俺は皆の訝しげな視線にちょっと怯みつつ
「え？あれ？皆、どうしたんだ？何でそんな目で俺を見るのかな？」
　そう聞きつつも俺は心の中で（あれ？俺、また何かやっちゃったかな？）と内心焦りつつ聞いてみると、瞬としおんは俺に疑惑の目を向けつつ
「・・・どういう事だ？俺はまだお前には自己紹介をしてはいないぞ？何でお前は俺の名前を知っているんだ？」
「そうね、そこの所、詳しく聞きたいものね。あなたは牧村君の名前だけでなく私の名前も知っていた。これはどういう事なのかしら？それに、どうして私達の顔を見て涙を流

したりしたのかしら？」

その言葉に俺は、冷や汗をだらだらと流しつつ、２人の問いかけにどう返答すべきか悩んでいたのだが、そこに更にこなたが

「私も気になるなー。それに、私の事も名前で呼んでいいって言ったけどさ、何かこう、慶一君は私の事を呼びなれている感があるよね？妙にその呼び方が自然だったしさー。」

と言う追い討ちに加え、かがみ、つかさ、みゆきにも俺の事を不思議な物を見るような表情で見つめられ、更に頭の中をパニックにしていたが、俺は一度ぶんぶんと左右に頭を振ってパニックになっている頭の中を整理すると、３人にとっさに思いついた言い訳をする。

「・・・あー、えっと、それはだな・・・俺がこの学校に来る前に居た学校に親友が居た訳だが、そいつらとはかなりの仲良しだったんだよ。で、そいつ等の名前が瞬介としおんって言う名前でな、雰囲気や話し方もお前等にそっくりだったんだ。で、涙を流したのは、俺がそいつ等とはなればなれになる時にはお互いに涙を流すほどの悲しい別れだった事を、２人の顔を見て思い出して、それで、つい涙を流してしまったと言う訳だ。こなたの方についてはそう呼んでいいと言われると、俺はその時から名前を普通に呼べるくらいのフランクな人間だ、という事だよ。」

と、身振り手振りを交えて、必死にでっち上げた言い訳を説明する俺。
そんな俺を訝しげな態度で見ていた3人だったが、とりあえず納得してくれたみたいだった。
「・・・うーん、何となく白々しい気がしないでもないが、まあいいだろ。それに、お前は悪い奴じゃなさそうだしな。」
「そうね。人を騙すような悪い人が流すような涙には見えなかったわ。さっきのはね。とりあえず信じてあげる。」
「ふむ。話しやすいのはいいよね。慶一君がそういう人だと分かったら、なおさらやりやすいしね。」
と、3人はそう言い、ふとかがみ達の方に視線を向けると、3人共さっきのような視線ではなくなっていた事に俺は心の中で（あー・・・やばかった・・・ほんとに気をつけないとなー・・・ついついボロを出しそうになるよ・・・なんにしても信じてくれてよかった・・・）と考え、ほっと胸を撫で下ろしていた。
そして、2人もまた改めて俺に自己紹介をしてくれた。
「ま、とりあえずだ。改めて自己紹介させてくれ。俺は牧村瞬一、これでも一応格闘技の道場の長男だ。よろしくな?えっと、森村慶一でいいんだっけ?」
「私は篠原しおん。よろしくね?森村くん。」

そう言う2人に俺も頷いて
「森村慶一だ、よろしくな？牧村。それと、篠原さん。俺の事は名前で呼んでくれても構わないよ。」
そう言うと、2人共俺に
「おう、よろしくな。それと、俺の事も名前で呼んでくれて構わないぞ？」
「そう？ならそうさせてもらうわね。慶一君も私の事も名前で呼んでくれていいわ。」
そう言ってくれたので、俺もその言葉に頷いて「よろしく。瞬、しおん。」と言うと同時に俺達は握手を交わしたのだった。
そうこうしているうちに、昼休みが終了する時間が近づいてきたのだが、こなたはまだ1つチョココロネを残していたらしく、昼休み終了のチャイムが鳴ってもその一個を消化しきれずに、黒井先生に見つかって注意を受けていたのだった。
そして、その日の放課後、皆で集まって桜藤祭の手伝いの事について話を聞く事となった。
「・・・という訳で、学園祭の準備のお手伝いをお願いしたいのですが。それと、これはその資料ですので、後で一通り目を通していただけるとありがたいです。」
そう言って、俺にかなりの枚数で分厚くなっている学園祭に関する資料をみゆきが渡してくれた。

俺はその枚数に弱冠引き気味になりつつも、それを受け取って
「あ、ああ。でも、凄い量だな。これ全部関係資料なのか。」
そう言うと、みゆきも苦笑しながら
「は、はい。要点のみに絞ったのですがそれでも・・・。」
そう言うみゆきにこなたが
「えー？私、この半分位しか読んでないよ？」
と言う言葉をきっかけに、６人のやりとりが始まった。
「資料はお渡ししましたよね？」
「記憶のかなたに消えてるかも・・・。」
「部屋のどこかに、でしょ？慶一くん、この馬鹿を見習っちゃだめよ？」
「ははは・・・でも、俺にも手伝える事あるかな？」
「うん。一杯あるよ～？今は人手が足りてなくて困ってるんだ～。」
「私の方も色々兼任している物がありますので、助けてくれる方がいてくださるとありがたいですね。」
「まあ、高良は確かに大変だよな？学園祭の実行委員に俺達と泉達と合同でやる劇の進行兼監督もやってる訳だしな。」
「高良さんには負担を強いている事は悪いと思っているわ。その分私達も裏方などで

フォローはするつもりだけど・・・」
「なるほどね・・・かなり大変な状況である、って事は理解したよ。それで？今日から手伝っていけば？いいのかな？」
「いえ、今日はこのまま解散になります。」
「体育館が使えないんだよね？」
「ええ。今日は他のクラスの方が使う事になってましたから。」
「なら、今日は久々に早く帰れそうね。皆、私帰りにコンビニに寄ろうって思ってるけど、皆はどうする？」
「賛成ー。漫画の立ち読みもしたいしね。」
「わたしもお腹すいちゃったからお菓子買おうかな～？」
「俺もつきあうかな。買い物もあるし。」
「私も一緒に行くわ。頼まれているものもあるからね。」
「では、私もお付き合いしますね。慶一さんはどうされますか？」
と、最後にみゆきが話しを振って来たので、俺はとりあえず少し考えてから
「コンビニって近くにある奴だろ？皆がすぐに帰るつもりがないのなら、そこで少し待ってて欲しいけど、いいかな？」
そう答えると、こなたは俺に「ん？何か用事でもあるの？」と聞いて来たので、俺は

適当に
「ああ、ちょっと黒井先生に用事があってさ。それを済ませたらすぐ俺も合流するからさ。」
　そう言うと、こなたも納得したようで
「なるほどねー。わかったよ。それじゃコンビニで待ってるから早く来てよね。皆、そういう事だから先に行こっかー。」
　そう言うと、他の皆も「それじゃ、先行ってるわね？」「けいいちくん、ごめんね～。」「んじゃ先行ってるぞー。」「私も行くわ。それじゃ後でね？」
　そう言って出て行ったのだが、みゆきだけは俺の側に来て
「私も先に行きます。あの、慶一さん。永森さんの方にも慶一さんからも声をかけてもらってもかまわないでしょうか？永森さんにもご協力いただきたいのですが、私達も、永森さんには中々話し掛けるチャンスがないもので困っているんです。慶一さんは永森さんと一緒に転校してこられた事もあり、私達よりは言葉を交わされているのでは？と思いましたので、出来ればそちらの方もご協力お願いできますか？」
　と言うみゆきに俺も頷くと
「ん？そういう事なら協力するよ。でも、あれからも話すチャンスって結構なかったか？休み時間なんかもあったよな？そういう機会ってさ。」

そう言いつつも、みゆきに話すチャンスについて指摘すると、みゆきは困ったような表情で

「・・・実は、あの後何度か永森さんに話し掛けてみようと思ったのですが、何故か少し目を離した隙にいなくなってしまっていて、話す事ができなかったんです。私達も極力話し掛けるようにはしてみますが、慶一さんもどうか、よろしくお願いします。」

その言葉に俺は、少し妙な感覚を覚えつつも頷くと

「わかったよ。とりあえず、今日はコンビニに寄ってから帰宅だな。じゃあ、俺は用事を済ませてくるから。」

そう言うとみゆきもにっこりと笑って

「はい。それでは私は先に皆さんの所へ行きますので。では、後ほど。」

そう言って教室を出て行くみゆきに手を振ると、俺は、やまとの事を気にしつつも、皆が待っていてくれるであろう時間内で校舎内等をうろついて、手掛かりを見つけようと走り回った。

だが、色々回ってみたが、この日は結局何も見つける事ができなかった。

最後に星桜の樹がある場所へとやって来た時、そこには樹を見上げてたたずむやまとの姿があった。

俺は、そんなやまとの姿を見て声をかけてみようと思い、やまとの側に近づいていっ

た。
　そして、極力やまとを脅かさないように気をつけつつ、声をかけたのだった。
「よう。皆ももう帰っちゃったけど、お前は帰らないのか？」
　そう声をかけると、やまとは俺の方に振り向いて
「・・・もう少ししたら帰るわ。私に何か用？」
　そう聞いて来たので、俺はとりあえず
「色々聞きたい事はあるが、とりあえず、朝に聞いたこと覚えておくようにするよ。それと、文化祭の手伝いの件でみゆきから頼まれているからな。その件に関しても、明日話せるのなら皆と話して欲しいってとこだ。」
　そう言うと、やまとは少しの間無言で俺の顔をじっと見つめてから
「・・・意味がないのに？その先に進みはしないのに？」
　そう言ってくるやまとに俺は
「それは、時間のループの事を言ってる、って解釈していいんだな？何にしても、お前の仲間が言う原因とやらを取り除く事が出来れば、この世界の時間は先へと進んで行くって事だよな？」
　そう言うと、やまとは俺を見て
「・・・ある程度の事は知っている、という事ね？けど、私にはその原因をあなたに教え

る事はできない・・・その原因はあなた自身の力で気付くしかないわ。今言える事はそれだけ・・・でも、もしも出来るのなら・・・この世界を救う為に力を貸して欲しい・・・。」

そう言ってくるやまとに俺は頷いて

「わかってる。俺の出来る事なら協力は惜しまないつもりだ。だから、やまとの中にいる誰か。あんたも決して諦めないでくれ。俺も諦めない。皆を助けたいからな。」

そう言う俺に、やまとはふっと薄い笑みを浮かべると

「・・・そうね。今はあなたに頼る以外には方法もないみたいだし、僅かでも希望は持ちたいものね・・・森村君、もしもあなたに何かを伝える事が出来そうな時は、おそらくは私の方からコンタクトはとるようにはしてみる。けれど、あまり期待も出来ない可能性もある、という事だけは頭に置いておいて欲しい。私からは今はそれだけ・・・。」

そう言って、再び星桜の方へと視線を向けるやまとに俺は

「わかった。んじゃ、俺はそろそろ行くよ。やまとも遅くならないうちに帰れよ?じゃあな。」

そう言って俺は、皆の待つコンビニに向かう為にその場を後にした。

そして、コンビニに向かいながら俺はやまとの仲間への交信を試みる。

(聞こえるか?聞こえたら返事をしてくれ。)

そう頭の中で呼びかけると、少しして返答が帰ってきた。

（はい。聞こえています。何か御用ですか？）
　その言葉に俺は
（お前等の仲間って奴に会ったぞ？なあ、どうしてお前等の仲間はやまとの姿をしてたんだ？）
　そう尋ねると、やまとの仲間は
（・・・それは、彼女が、この世界で起きる事故の被害者だったからです。）
　そう答えるやまとの仲間に俺は驚きつつ、更に問い掛ける
（どういう事だよ、事故の被害者って・・・）
　その言葉にやまとの仲間はしばしの間をあけつつ
（・・・分かりました。お話しましょう。実は彼女は桜藤祭の当日に八坂さんと約束をし、星桜の樹の所で待ち合わせをしていました。しかし、時間になっても八坂さんは現れず、仕方なく彼女は1人で桜藤祭を見て回ろうと動こうとしましたが、その時に事故が起き、たまたま一番近くにいた彼女を巻き込む事になってしまったのです。今彼女の中に入っている私の仲間はそんな彼女の命を救う為に彼女に同化し、彼女を生き長らえさせている状態なのです。）
　という説明を聞いた俺はやまとの仲間に
（その話が本当だとしたら、事故の原因を取り除いたらあんたの仲間はやまとの体から

離れる事になる訳だよな？生命の維持の為に同化しているのなら、あんたの仲間がやまとから離れたらやまとは・・・生命維持が出来なくなるんじゃないのか？）

そう頭の中で強い口調でやまとの仲間に尋ねるとやまとの仲間は

（それは安心して下さい。今の時点ですでに彼女の傷は完治しています。もし、私の仲間が彼女から離れたとしても彼女が死ぬ事はありません。ただし、ループ中に彼女が体験している記憶は消えてしまいますが、それ以外は、元に戻った時には彼女も今まで通りに過ごしていけます。）

そう説明された俺はほっと胸を撫で下ろしつつ

（そうか・・・それなら安心だな・・・。それと、後1つ、聞いておきたい事があるんだが、この世界に俺の両親も、そして、瞬やしおんも、更に他の皆も存在している事はわかった。でも、もしもこの世界が俺の元いた世界とは存在する人達、いない人達が逆になっているとしたら・・・この世界にも俺は居たんじゃないのか？なのに、どうしてこの世界では俺だけが存在してないんだ？」

そう尋ねると、やまとの仲間は少し言いにくそうにしつつも、その俺の疑問に答えてくれた。

（・・・少し申し上げにくい事ではありますが、お話しておきます。あなたをこの世界へと呼ぶ前に私が森村さんにした説明は覚えていますよね？）

そう確認してくるやまとの仲間に俺は（ああ。ちゃんと覚えてるよ。）と答えると、やまとの仲間は、それを確認してから更に話を続ける。

（その中で、あなたが私に質問した、この世界にも世界を救う為に動こうとする人間がいなかったのか？という問いに私は、トラブルがあって、その人物とはコンタクトを取れなくなってしまったと言いました。実は、それが、この世界のあなただったのです。）

その言葉に俺は驚きつつ（え？どういう事だ？それって・・・）と言うと、やまとの仲間は続きを話してくれた。

（実は、この世界ではあなたも確かに存在していました。しかし、その時も言ったようにこの世界はあなたの居た世界とは合わせ鏡のような世界。その世界において、あなたのご両親も、そして、あなたの親友や彼女になったかもしれない人が生きています。ですが・・・あなたの世界では、あなたが幼い頃にご両親が亡くなられていますが、この世界においてはそれが逆となっていたのです。つまり・・・この世界のあなたは、この世界に生まれて1年程度で病気によって亡くなっているのですよ。だから、あなたのみがこの世界には、そして、今のこの世界を救う為に、動いて欲しい時間に存在していなかったのです。）

その言葉にかなりのショックを受ける俺。

そして、俺は、やまとの仲間に苦しげにうめきつつ

（だから、なのか?だから、こなた達も、瞬もしおんも・・・俺と出会ってもいなかったから、交流を持たなかったから、皆は俺の事を知らなかった、って事なのか・・・。）

そう言葉を搾り出す俺に、やまとの仲間はしばし無言で間を開け、少ししてから

（・・・残念ですが、そういう事です。だから、この世界では、牧村さんが死ぬ事もなく、そして、しおんさんも生きて、そして、普通に何の事故にも巻き込まれる事もなく、今まで過ごして来れたのです。そして、彼らはこなたさん達に出会った。本来なら、あなたが出会うべき人達に。）

そう言うやまとの仲間に俺は、少し落ち込みつつ

（そういう・・・事だったんだな・・・とりあえず俺の中で渦巻いていた疑問は解けたよ・・・。）

そう言うと、やまとの仲間は俺に

（・・・申し訳ありません・・・このような事をお伝えする事はとても心苦しい事ですが・・・。）

そう声のトーンを落としながらそう伝えてくるやまとの仲間に俺は

（構わないさ。それでも、この世界では瞬もしおんもちゃんと生きてるんだしな。俺がいない事は少し残念だったけど、それでもあいつ等の姿を見れたからそれでいいさ。さて、そうなると俺が頑張る理由がまた1つ増えたな。俺がどこまで出来るかわからない

が・・・頑張らせてもらうよ。）

そう言うと、やまとの仲間はほっとしたような声で

（・・・私にはあなたに頑張って下さいとしか言う事はできませんが・・・どうかよろしくお願いします。）

そう言うやまとの仲間に俺は気を取り直して（ああ、やってみる。）と短く言って、今回の交信を終えた。

そして、もうすぐコンビニに辿り付く所まで来ていた俺だったが、その時、こなた達の居るコンビニでちょっとしたトラブルが起きていた事に、その時の俺は気付いていなかった。

旋律のもう1つの邂逅そして、つける心の決着

俺の知る、俺の世界に居ないはずの旋律達との邂逅を経て俺は、この世界に於いては元の世界で一緒に過ごす事ができなくなっていた2人の旋律と共に、この世界を救うまでの間ではあるが、一緒に居れる事に密かな喜びを感じていた。

と、同時に、この世界に於いて、俺自身がどうして存在していないのかを疑問に思っていた俺は、やまとの仲間にその事情を問い正す。

そして、俺は、やまとの中にやまとの仲間がいる理由と、俺だけがこの世界に存在しないその理由（わけ）を知った。

俺の存在しない理由を知り、少し落ち込む俺だったが、それでも、瞬やしおんがこの世界で元気でいるなら、と前向きにこの状況を捉える事にしたのだった。

そして俺は、学校での用事も済ませて待ち合わせ場所であるコンビニに向かったのだが、そこで、俺の気付かぬうちにトラブルが起きていたのだった。

遡る事２０分程前・・・・・・

つかさｓｉｄｅ

今日からやってきた、新しい転校生である森村慶一くんとお友達になったわたしとこ

なちゃん達。
　色々あって自己紹介も済ませたのだけど、とりあえず今日は、桜藤祭の準備は出来ないとの事だったので、おねえちゃんの提案に乗って私達はコンビニへとやってきた。
　こなちゃんは雑誌の立ち読みをし、おねえちゃんはお菓子等を買い込み、ゆきちゃんも軽く食べられそうなものを買い、しーちゃんは頼まれたお使いを済ませ、まーくんはトイレへと向かったようだった。
　わたしも買いたい物を買い込んでから、一端コンビニの外にでてそれを口にしようと、人の邪魔にならない場所へと移動して買い込んだお菓子の袋をあけたんだけど、その時にうっかりその袋を破裂させてしまい、近くで集まっていた不良っぽい感じの人に、そのお菓子を浴びせる事になってしまった。
　そして、わたしは慌てて、その人に謝ろうと口を開こうとしたのだけど、その人は怒りの形相でこちらへと詰め寄って来て
「ああ?･てめえ、いきなり何してくれてんだ、こら!･」
　と、いきなりわたしの胸倉を掴んで来て、怖い顔でそう言ってくるその人が怖かったけど、とにかくあやまらなきゃ、と思ったわたしはその人に涙目になりつつも
「あ、あの、ごめんなさい・・・わざとじゃないんです・・・その・・・ごめんなさい～。」
　そう必死に謝る私だったが、その人は聞く耳を持ってくれないようで、わたしの胸倉

を掴んだまま
「なあ、ねえちゃん。ごめんで済んだら警察はいらねえんだよ、わかってんのか？ああ!?どうしてくれんだ？てめえが浴びせたもんの所為で、俺の服にこーんなみっともねえ染みができちまったじゃねえか!!」
そう凄んでくるその人にわたしは涙目になりながら
「クリーニング代は出します。だから許してください～!」
そう言ってパニックになりつつも、必死にそう言葉を搾り出すわたしをその人はじろじろと眺める。
その態度にわたしは、ますます体がすくんで動けなくなっていった。
そんなわたしを、その人の取り巻きらしい人達がニヤニヤとしながら見ているが、その人達もこの人を止める意思はなさそうだった。
そんな状況に、ますます絶望感を募らせるわたしの心を知らない、わたしの胸倉を掴んでいるその人は私に
「・・・ふうん？よくみりゃあんた結構可愛いじゃないか。よう、ねえちゃん。これから俺達と付き合えよ。そうしてくれる、っていうんなら、さっきの事はなかった事にしてやってもいいぜ？」
そう言ってくるの聞いて、わたしは更に恐怖心に包まれて

「え?あの・・・でも・・・わたしは・・・。」
　何とか断りたいわたしは、必死に言葉を発しようとするが、中々上手く言葉が出て来てくれない。
　そんなわたしの態度を見ながらその人は、再び私を睨みつけると
「なんだあ?断ろうっていうつもりかよ。だったら仕方ねえなあ。痛い目見る方を選んだ自分に後悔するこったなあ。お前等!こいつを連れてくぞ!?」
　と、その人は取り巻きの人に声をかけ、わたしの腕を引っ張ってどこかへと連れて行こうとする。
　わたしは恐怖のあまり
「いや!やだ!!行きたくない!!離して～!!」
　そう言って精一杯の抵抗を見せるが、そんな抵抗も無駄のようで、わたしはもうだめだと思い、目を瞑る。
「こらっ!あんたたち!!私の妹に何してくれてんのよ!!その手を離せ!!」
　その叫び声にそっと目を開けると、そこには私のピンチに気付いてくれたおねえちゃんが、わたしを連れて行こうとする人に食ってかかり、わたしをその人から引き剥がそうとした。
「なんだあ?こいつの事を妹、って言ったな?よくみりゃお前も中々可愛い顔してる

じゃねえか。丁度いい。お前も一緒に来な！俺達がちゃあんと可愛がってやるからよ。おい、お前等！もう1人追加だ!!」

そう言って掴みかかるおねえちゃんを、取り巻きの1人が取り押さえる。

おねえちゃんは必死に抵抗して

「ちょっ！離しなさいよ!!あんたら、こんな事して、ただじゃすまないわよ!?」

そう叫んで必死に暴れるおねえちゃんに、取り巻きの1人がおねえちゃんのおなかを殴るのが見えて、その瞬間、おねえちゃんが気絶したのを見たわたしは、必死におねえちゃんの事を呼んだ。

「!?おねえちゃん！おねえちゃ～ん!!」

そう叫ぶのを見た取り巻きの1人が、わたしの側に来ると、わたしのおなかを殴りつけた。

そして、わたしはそのまま意識を失ったのだった。

しおんｓｉｄｅ

かがみさん達と一緒にコンビニに来た私達は、それぞれ思い思いに自分たちの用事を済ませていた。

しかし、そんな時、コンビニの外で、つかささんとかがみさんの叫ぶ声が聞こえたのを受けて、それがただ事じゃないと悟った私は、すぐさま表へと飛びだした。

その際に、こなたさんや、みゆきさんも騒ぎに気付いたようで、一緒にコンビニの外へと飛び出して来た。
そして、声のした方へと視線を向けると、そこには、ぐったりしながら男達に連れて行かれる２人の姿が見えた。
「え?･ど、どうなってるの?･」
そう呟く私だったが更にこなたさんが
「かがみ?･つかさ?･た、大変だ!･どうしよう・・・。」
そう言って慌て出したのを見て、みゆきさんも青い顔をしながら
「わ、私、牧村さんを呼んで来ます!･」
そう言ってコンビニへと駆け出すみゆきさんを見て、私はこなたさんに
「こなたさん。私が連中の後をつけるわ。牧村君が戻ったら、ＧＰＳ起動させて私の後を追って来てと伝えて。」
そう言うと、こなたさんは慌てつつ
「え?･で、でも大丈夫?･しおんさんまであいつらに捕まっちゃったりしたら・・・。」
その言葉に私はこなたさんの両肩を掴んで
「大丈夫。無理はしないわ。遠目から奴等を追うようにするし、むやみに手出しもしない。だから、伝言お願いね?･それと、慶一君が来たら、この事を伝えて助けを呼んでも

らって欲しいの。お願いね？」

その私の説得にこなたさんは渋々頷いて

「わかったよ・・・でも、絶対無理しちゃだめだよ？」

そう言うこなたさんに私も「分かってるわ。任せて。」と力強い頷きで答えると、すぐさま連中の向かった方へと走り出した。

そして、奴等が曲がった曲がり角の方へと辿り付いた時、奴等の姿を捉えることが出来た私は早速ＧＰＳを起動して牧村君の携帯へと情報を送ったのだった。

それから、奴等の後をしばらくつけていくと、奴等は人気のない公園へと２人を連れ込んでいくのが見えたので、私は奴等に見つからない場所から、連中を監視しつつ、状況報告のメールをこなたさんと牧村君の携帯へ送ったのだった。

瞬一ｓｉｄｅ

今日からやってきた転校生との挨拶も済ませ、今日の所は桜藤祭の準備も出来ないとの事だったので、このまま解散となったのだが、かがみがコンビニへ行こうと言い出したのをきっかけに、俺達もそれに付き合ってコンビニへと行く事にした。

そして、後から来るといった慶一を待ちつつ、それぞれに用事を済ませていく中、俺もちょっとトイレに寄りたくなったので、トイレへと入ったのだが、その最中にコンビニの外でのトラブルが起きていた事を知らなかった。

トイレを済ませ、店の中を見回してみると、店内にいるはずのメンバーの姿がない事に首をかしげていた俺だったが、そこに俺を見つけ、なにやら慌てた様子で俺の所にやってきたみゆきさんが
「瞬一さん、大変です！かがみさんとつかささんが店の外で集まっていた不良集団に連れていかれてしまったんです！しおんさんが彼らの後をつけて居場所が判明し次第、ＧＰＳ情報を瞬一さんの携帯に送信する、と言っていました。しおんさんからの連絡は来ていますか？」
そう報告してくるその言葉に俺は驚いて
「な、なんだって!?ちょ、ちょっと待ってろ、今確認してみる。」
そう言って俺は、自分の携帯を取り出すと、しおんの携帯のＧＰＳ情報が来ているかどうかを確認する。
そして、情報が届いている事を確認した俺は、みゆきさんに
「どうやら居場所は特定できたようだな。俺は篠原のいる場所へと向かう。みゆきさん、悪いんだけど、慶一を待っててやってくれないか？あいつもそろそろ来る頃だろうし、その時に俺達の誰もいないんじゃあいつにも悪いからな。で、それを伝えたら警察を呼んでくれ。それまでには、そいつ等と決着はつけておくつもりだからな。」
そう伝えると、みゆきさんは心配そうな表情を俺に向けながらも頷いてくれ

「わ、わかりました。くれぐれもご無理はなさらないようにしてください。それと、しおんさんと連絡が取れるようでしたら、私の携帯にもＧＰＳ情報を送信して下さいとお伝え願えますか？」

そう言ってきたので、俺はその言葉に頷くと

「わかった。伝えとくよ。それじゃ、俺はすぐに出る。２人は必ず助けてくるからな？」

その言葉に、みゆきさんが頷いてくれたのを確認した俺は、すぐさまＧＰＳ情報を頼りに店を飛び出して篠原の待つ、かがみ達の連れて行かれた現場へと走り出したのだった。

慶一ｓｉｄｅ

コンビニの方でそんな騒ぎになっていた事を知らない俺は、少し足早にコンビニへの道を急いでいた。

そして、ようやくコンビニ前に辿りついたのだが、店の外にはこなたとみゆきの２人はいたけれど、それ以外の連中の姿が見えなかったので、俺が遅くなったから、用事もあって先に帰ったかな？と考えつつ、店の前にいる２人に声をかけたのだった。

「こなた、みゆき、すまん、遅くなった。他の皆はどうしたんだ？用事があって先に帰ったとか？」

そう声をかけると、２人共明らかに焦りを滲ませたような顔で俺の声に振り向くと

「慶一君、やっと来たんだね!?大変なんだよ!かがみとつかさが不良連中に連れてかれちゃったんだ!しおんさんと瞬一君が後を追ったんだけど、私達は君を待っていなきゃいけなかったからここに残ってたんだよ。」
「お待ちしていました、慶一さん。実は泉さんの言った通りなんです。あなたと合流したら、私はすぐに警察を呼ぶ、その予定でしたので・・・。」
　そう説明する２人の言葉に俺は驚いて
「なんだって!?こなた、みゆき、２人の居場所は分かるのか!?分かるなら俺もそこへ向かうぞ!?かがみとつかさもそうだけど、瞬達もほおってはおけない!!」
　そう言う俺に、こなたは驚きつつ
「え?ほ、本気?でも、大丈夫なの?」
　そう言うこなたに、みゆきもまた心配そうに俺を見ると
「慶一さんのお気持はとてもありがたいのですが・・・やはりここは警察にお任せするべきかと思います。下手に加勢にいったとしても、手助けができるかどうかは・・・。」
　そんな２人に俺は決意を込めた目を向けながら
「２人の不安な気持はよくわかる。けど、今は一刻を争う時。頼む、俺の事を信用してくれ。俺なら・・・いや、俺と瞬とでなら、きっと２人を助け出せる。だから、俺を現場へと案内してくれ。頼む、２人共!!」

その言葉にこなたとみゆきは、少しの間どうするべきかと悩んでいるようだったが、俺に顔を向けると

「わかった。慶一君を信用するよ。みゆきさん、しおんさんからのＧＰＳ情報は届いてるよね？すぐに瞬一君達の所へ行こう!!」

そう言ってくれ、みゆきもまた俺に真剣な目を向けると

「・・・慶一さんのお気持は分かりました。大丈夫です、泉さん。しおんさんからのＧＰＳ情報は届いています。すぐに向かいましょう。」

そう言ってくれたの見て俺も力強く頷くと、３人で現在しおん達がいる場所へと向かって走り出したのだった。

不良ｓｉｄｅ

２人の女を拉致して人気のない公園へと連れて来た。

そして、２人を取り巻き２人に抑えさせておいて、俺は取り巻き達と話をしていた。

「に、しても、中々可愛い子達だよなあ・・・へへへ、こりゃ色々と楽しみだぜ。」

そう、下卑た笑みを含ませてそう言う奴とはまた別の奴が

「なあ、さっきのコンビニにいた時にちらりと見たんだが、このねーちゃん達と一緒に牧村の奴も居やがったぞ？丁度いい人質も出来ている事だし、あの人を呼んだ方がいいんじゃないのか？」

そう言う奴に俺は頷きつつ
「・・・そうだな。牧村の野郎には俺らも散々むかつく目にあわされて来たしな、それに、あの人もあいつへの復讐は望んでいた所のようだからな。よし、俺が連絡をつける。お前等はその２人が逃げないようにしっかりと見張ってろ！」
そう言いつけてから、俺は携帯を取り出し、あの人〝成神章〟さんへと連絡を入れた。
俺の話を聞いたあの人は、すぐさま駆けつけるといっていたので、俺達はこの場にて成神さんがやってくるのを待つ事にしたのだった。
そして、それから５分程度で成神さんは俺達の居る公園へと現れた。
「奴の連れを人質に取ったそうだな？よくやった。こいつは報酬だ、受け取れ。それと同時にもう一働きしてもらうぞ？」
そう言って、成神さんから報酬を受け取った俺達は、更に牧村を倒す為に仕事をする事となった。
そして、それから少しして、牧村は俺達の居る公園に現れたのだった。
牧村ｓｉｄｅ
篠原からのＧＰＳ情報を受け取った俺は、それを頼りに篠原の居る場所を目指して走った。
連中はどうやらそんなに遠い場所にはいなかったようで、すぐに公園内を見つめる篠

原を見つけると、俺は篠原の側に寄って声をかけた。
「待たせたな、篠原。ここがそうなのか？」
その声に振り向いて頷きながら
「待ってたわ。ええ、そうよ。とにかく、あれを見て？」
そう言って篠原は公園内を指差したので、俺はそっちへと視線を移す。
すると、そこには１０人の不良に加えて、見知った顔がその中に混じっているのを見つけた。
「・・・あれは、成神？何故あいつが・・・まさか、あいつはあの不良どもとも関係を持ってた、って事か？流石に姑息な事が好きな奴だぜ、自分じゃまともに俺に勝てないくせに、そういう所には知恵が回りやがる・・・。」
俺は公園内を見つめつつそう呟いたのだが、その言葉に篠原は俺に不安気な視線を向けながら
「牧村君、どうするの？相手は１０人以上、そして、かがみさん達も人質に取られてる。このままじゃ打つ手がないわよ？」
そう言う篠原の言葉に俺は、奴等を見つめて考え込む。
しばらく考え込んでいたが、結局上手い手が見つからない俺は、とにもかくにもかがみ達を救出する事を優先させようと考え、１つ決意を固めると、公園へと乗り込んでい

こうとした。
　だが、そこに、俺に声をかけてくる奴が居たので、俺は思わずその場に踏みとどまったのだった。
「ふう、やっと着いたか、しおん、瞬、待たせたな。」
「はあ、はあ・・・慶一君足はやいねー・・・置いてかれるかと思ったよー・・・。」
「け、慶一さんの運動能力はかなりのものなのですね…かなり…きつかったです…。」
　そう言う慶一達に俺は驚きつつ
「慶一、それに、泉や高良も・・・お前らどうしてここへ？」
　そう声をかける俺に、慶一は真剣な表情で頷いて
「友達の・・・ピンチだからな。その手助けの為に俺はここへやってきた。瞬、俺もかがみ達の救出の手助けをさせてくれ。」
「慶一君がどうしても、って聞かないからさ、私達も慶一君を信用してここまで連れてきたんだよ。」
「私もしおんさんからのＧＰＳ情報は受け取っていましたからね。それで慶一さんを案内してきました。」
　そう言ってくる慶一に俺は、困惑の表情を向けつつ
「それは・・・ありがたい申し出だが、いいのか？今回の事は、結構荒事だぞ？」

そう言う俺に、慶一は不敵に笑って

「上等さ、それに、俺も一応は荒事には慣れているんでね。奴等との戦闘も望む所だ。」

その言葉に驚きつつも、何故かそうやって不敵な笑みを見せる慶一に頼もしさを覚えて

「・・・なら、手を貸してくれ。」

そう言う俺に慶一も力強く頷いたのだった。

慶一ｓｉｄｅ

みゆきがしおんから受け取ったＧＰＳ情報を頼りに俺達もちょっと遅れはしたが、しおん達の待つ現場へと到着した。

そこには、公園内を伺う瞬としおんの２人がいて、この先をどうするか、という事で悩んでいるようだった。

俺はそんな瞬に声をかけ、２人を取り戻すのに協力すると申し出た。

最初こそ俺に遠慮していた瞬だったが、俺の自信ありげな態度を見て、協力して欲しいと言った来たのを受け、俺もまた瞬に頷き返し、俺達は再び公園内の状況を探った。

「なるほど、全部で１１人か・・・ん?あいつは・・・まさか、成神?何故、あいつが・・・。」

そこまで言った瞬間、俺は元の世界におけるあいつのしでかした事を思い出し、思わず強い殺気をだしたらしい。

　それに気付いた４人が思わず
「知ってるのか？っておい！」
「慶一くんも知ってるの？って・・・何、これ？」
「うわあ・・・人数多いねえ・・・っ!?」
「これは・・・やはり応援を呼んだ方が・・・はっ!?」
　という皆の言葉に俺は思わず
「ふう・・・いかんいかん、ちょっと冷静になれ、取り乱したら連中の思う壺だ・・・って、皆、どうした？」
　そう呟きつつ、驚きの表情で俺を見つめる４人に声をかけると、４人は
「おいおい・・・今すげえ殺気だったぞ？あいつと何か因縁でもあるのか？」
「せ、背筋が凍ったわ・・・今のが殺気っていうものなの？」
「す、すっごい怖かった・・・慶一君、そういうの勘弁だよ。」
「お、思わず身がすくんでしまいました・・・こんな感覚を感じたの初めてです・・・。」
　その言葉に俺は、奴の姿を見た時に思わず取り乱した事で殺気を放ってしまったらしかったようで、俺はすぐさま皆に謝り、更に瞬へと俺の考えた作戦を伝える。
「すまん、まあ、ちょっと嫌な事を思い出してついな。それはともかく、作戦を立てないと難しそうだ。とりあえずは・・・瞬、お前が正面から出て行って奴等の注意を引いて

くれ。俺は隙を見てかがみ達を捕らえている連中をぶちのめしてかがみ達の安全を確保する。それまでは、下手に手出しは出来ず、殴られる事になるかもだが、少しの間だけ耐えてくれ。」

そう言うと、瞬は腕組みをしながら考え込んでいるようだったが、そのままの体制で俺に顔を向けると

「その作戦はいいかもしれない。だが、本当にかがみ達の事、任せてもいいんだな？」

その瞬の言葉に俺は力強く頷いて

「ああ。任せてくれ。俺が自分で言った以上はこの責任、俺の名誉に誓って果たす。だから、連中の注意のひきつけは任せるぞ？」

その言葉に瞬も頷いて

「わかった。こっちは上手くやってやるよ。それじゃ作戦開始だな。」

そう言うと、瞬は公園内へと足を踏み入れた。

それを見届ける俺達だったが、しおん達は俺に

「本当に大丈夫かな？」

「慶一君、信じていいんだよね？」

「慶一さん、あまりご無理はなさらないで下さいね。」

そう言って来るのを聞いて俺は、再びみんなの不安を取り除くように力強く頷くと

「大丈夫だ。絶対にかがみ達も助けるから。それじゃ、俺も行動開始と行きますか。こなた、みゆき、これを持っててくれないか？」

そう言って、俺は学ラン脱いで、更に鞄も２人に預けると、かがみ達を拘束している連中の近くへと忍び足で動き出した。

その頃、瞬は・・・・・・

瞬一ｓｉｄｅ

慶一から、かがみ達の救出作戦を聞き、俺は、とりあえずあいつの立てた作戦に乗ってあいつの言うように他の連中の注意をひきつける為に公園内へと足を踏み入れる。

「おい！成神!!てめえ、俺の連れをさらうとはいい度胸してやがるな!?人質なんて姑息な真似使ってねえでたまには正々堂々勝負してみたらどうなんだ!!」

という怒号を響かせると、それに気付いたかがみ達のを拘束している３人を除いた８人が、俺の側まで嫌な笑みを顔に浮かべながらやってきた。

「よう、牧村ぁ―!!今まで散々俺をむかつかせてくれたてめえも今日は形無しだなあ!?お前の連れであるあの２人はこっちの手中だぜぇ!?あいつ等を傷つけたくなかったら、下手な抵抗はすんじゃねえぞぉ!?おら！お前等、やっちまえ!!」

そう言って、成神以外の７人が俺を取り囲む。

そして、一方的な暴力による蹂躙が始まった。

俺を羽交い絞めにして、そして、６人が殴る蹴るを繰り返す。
ゴッ！ドコッ！ズガッ！ガスッ！バキッ!!ガン!!ズン!!
「おらおらどうしたよ!?悔しかったら反撃してみろや!!もっとも、その為に行動を起こそうものなら、あいつらの無事は保証できねえけどなあー!!」
そう叫びつつ、更に殴る蹴るを繰り返す奴等。
そうしているうちに、かがみとつかさが奴等の腕の中で意識を取り戻したようで、一方的に殴られる俺の姿を見て
「・・・う、ここは、一体・・・え？瞬一くん？ちょっ！あんたら何やってんのよ!?やめなさいよ!!やめてってば!!」
「ふえ？おねえちゃん？あ・・・まーくん!?やめて、おねがい！やめてよ～!!」
と叫ぶ２人を見て、悔しさで奥歯を噛み締めていた。
俺は、この暴力に耐えながら心の中で
（くっ！慶一、急げ！このままじゃ俺も、そんなにはもたねえぞ・・・）
そう考え、慶一が動く時を待った。
慶一ｓｉｄｅ
瞬の陽動が始まったのを横目に俺は、２人を拘束している奴等へと一足飛びでたどり着ける位置へと移動していた。

瞬が殴られ始め、その時にかがみとつかさが意識を取り戻したらしく、殴られる瞬を見て、この非道さに悔し涙を流しながら叫んでいるのが見て取れた。
俺はそんな様子を見て、奴等に対して更に怒りを増しつつ、飛び込むタイミングを見計らう。
そして、奴等に隙が出来たその瞬間、俺は龍神流の歩法、瞬神を使い奴等の前に一瞬で移動した。
そんな俺に気付かない、かがみを拘束する奴の両肩目掛けて俺は
「螺旋連弾!!」
ドカカッ!!ボコン!ボコン!!
と螺旋の捻りを加えた拳を打ち込んで奴の両肩を外した。
その衝撃で「うぎゃあああっ!!」と悲鳴を上げ、両腕をだらりとたらすそいつの顎を打ち上げるように俺は更に
「螺旋掌!!」
ズガンッ!!
と、螺旋の捻りを加えた掌打を叩き込み、そいつを後ろの植え込みに吹き飛ばす。
そして、突然何が起きたのか、事態を把握できず呆然とする、つかさを拘束する男のわき腹にすかさず掌を添えて

「螺旋通打掌!!」
ギュルッ!ズンッ!!
と剄を内部に通すように打ち抜くと、つかさを拘束していた男は白目をむいて気絶した。
そして、ようやく俺の存在に気付いたもう一人の見張りが俺に食って掛かって来たが、俺はその突進を軽く避けると同時に
「螺旋連弾四壊!!」
ドカカカカッ!!ボコン!ボコン!!ボコン!!!ボコン!!!
という嫌な音と共にそいつの四肢の関節を外したのだった。
そして、かがみとつかさもようやく俺の事に気付いたようで
「え?一体何が・・・って、慶一くん!?」
「なに?どうなっちゃったの?あ、けいいちくん!」
そう言って、涙目の顔を向ける2人に俺はにっこりと笑うと
「お待たせ、2人共。怪我はないか?」
そう言うと、2人は俺に飛びついて来て泣き出した。
「うん・・・うん・・・私は大丈夫・・・慶一くん、ありがとう・・・。」
「怖かったよ～・・・ありがとう、けいいちくん。ほんとうにありがとう・・・。」

そう言って泣く２人に俺は、優しく諭すように
「すまん、遅くなって怖い思いさせちゃったな。もう大丈夫だ。これから瞬も助けなきゃならない。だから、少しここで待っていてくれ。連中は気絶してるし、危険はもうないからさ。」
そう言う俺に、２人はどうにか心を落ち着けると
「わ、わかったわ。慶一くん、あまり無理はしないでよ?」
「無事に帰ってきてね?まーくんと一緒に・・・。」
そう言う２人に俺は頷くと、瞬をボコボコにしている連中の方へと向き直った。
そして、そんな俺を成神が驚愕の表情で見ていたのだが、俺はそんな成神とそして、瞬に２人を無事救い出した事を伝える為に叫んだ。
「瞬!こっちは大丈夫だ!!お前もそろそろたっぷりとお礼を返してやれ!!成神っ!!お前が何をしようとも俺が全部そんな下らない企みなんざぶち砕いてやるぞっ!!手前だけは俺が許さない!!」
そう叫ぶ俺に、成神は俺を指差しながら
「お、お前はなんだ!?俺はお前の事なんて知らん!!俺に何の因果があるのか知らねえが、手前のような見ず知らずの奴に恨みを買う覚えもねえ!!」
そんな風に叫ぶ成神に俺は更に

「手前にはなくても、こっちにはあるんだよっ!!今ここで、２度とくだらねえ企みなど立てられないようにしてやる覚悟しやがれっ!!」

そう叫ぶと同時に俺は瞬達の方へと飛び出した。

瞬一ｓｉｄｅ

慶一の作戦どおりに事を進め、そして、今俺は、物凄い速さで３人を撃退し、かがみ達を救い出した慶一を目の当たりにして、俺は奴の自信のある理由を知った。

あの動き、スピード、そして技の切れは相当な物だと思えたからだ。

そして、奴はかがみ達を解放し、俺に反撃開始を告げる。

その声に応えて俺もまた、俺を羽交い絞めにしているやつに頭を打ち付けて拘束を解くと、慶一と共に反撃を開始した。

俺の背中にぴったりと納まり、俺の背中を守る慶一が凄く頼もしく思えた。

そして、俺達は数分もしないうちに残りの７人を叩きのめしたのだった。

「ナイスファイト、慶一。」

「お前こそな、瞬。俺を信じてくれてありがとよ。」

そう言って堅い握手を交わす俺だったが、俺はこいつとは本当の意味で親友に成れそうだ、と思えた。

だが、この時俺達は失念していた。

こっそりと俺達を狙う、何時の間にかこの場から姿を消していた奴がいた事に。
そして、そいつは俺の油断をついて持っていた鉄パイプを振り上げて、俺の背後から襲いかかって来たのだった。
慶一ｓｉｄｅ
瞬と共に残りの連中を片付けて、俺と瞬は改めて親友と認め合える握手を交わした。
そして、かがみ達を連れてその場を後にしようとした俺達の隙をついて、こっそりとどこかに隠れて隙をうかがっていた成神が、鉄パイプを振り上げて瞬に襲い掛かろうとしていた。
「瞬一くん、危ない!!」「まーくん！逃げて!!」
と言う2人の言葉に、俺はそれに気付いて成神に向かってダッシュする。
「瞬!?やらせるかよっ!!今度は俺が助ける番だ!!」
そう叫びつつ、瞬と成神の間へ飛び込もうとしたその時、俺の頭の中にあの声が響いた。
（・・・いいのですか？たとえ今、この時に成神を叩きのめしたとしても、ループする事になれば、それさえも無駄になってしまうかもしれないのですよ？）
そう言ってくる声に俺は
（・・・それでもいいさ。たとえこれが俺の自己満足だったとしても、元の世界で出来な

かった事が出来るなら、たとえ無駄になろうと構いはしない！今ここで、あいつの為に行動が起こせないようなら、俺はこの世界でもあいつの親友で居る資格なんてないんだ!!)

俺に忠告してくる声にそう叫び返すと同時に俺は、成神の懐に飛び込み

「龍神流奥義！百烈螺旋弾!!」

フォンッ！ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ!!

と、今までの万感の思いを込めて、成神に龍神流の奥義を叩き込んだ。

顔面からボディからボコボコに拳を打ち込まれて「ぎゃあああああっ!!」と叫びながら吹っ飛んでいく成神を見つめ、俺はこの世界でやっと、瞬との心残りを消し、瞬の無念を晴らす事が出来たのだった。

そして、全てを終えた俺の元に皆が駆け寄って来る。

「慶一、助かったぜ。ってか、すげぇ技だな・・・流石にちょっと成神がかわいそうに思えるがな・・・。」

「慶一くん、お疲れ様。あなたって結構強かったのね?見直しちゃったわ。」

「慶一君、おつかれー。いやあ、まさかあそこまで強いなんて思わなかったよ。どこかのバトル漫画の主人公みたいだねえ。」

「慶一さん、ご無事で何よりでした。それと同時に、かがみさんとつかささんを助けてくださってありがとうございます。」
　と言う言葉に俺は苦笑しつつ、ほおをぽりぽりと掻いていたが、更にかがみとつかさも
「慶一くん、本当にありがとう。瞬一くんと一緒に助けてくれた事、感謝してるわ。それに、皆の言うように本当に強いのね？助けられた瞬間は何が起きたのか分からなかったわ。」
「けいいちくん、まーくん。迷惑かけてごめんね？それと助けてくれてありがとう～。わたしもけいいちくんの動きが全然見えなくて何が起きたのか全然わからなかったよ～。」
　そう言う２人に俺は笑顔で
「はは。今回はスピードも命の作戦だったからな。まあ、一応、俺も鍛えている、って訳さ。だからこそ、今回は２人を助ける事が出来たんだけどな。とにかく、２人共無事で何よりだ。さあて、もう遅いし帰るとしようか。」
　その言葉に皆も頷いて、俺達は家路についたのだった。
　帰る時に俺達はそれぞれにメルアド交換等も済ませ、俺達は本当の意味での友達になったのだった。

ちなみにあの後は、親父〈この世界では叔父さんとなっているが〉に後処理を頼み、成神以下の連中には俺達には2度と近づけないように処置をとってもらった。

こうして、波乱の転校初日が終わって行く。

そして、その日の夜、皆からの初メールが届いたのだが、その中でこなたのメールが少し気になった。

その内容は・・・・・・

ｆｒｏｍ：こなた

今日は転校初日だったけど、色々あったねー。

私としてもかなり刺激の強い1日になったよ。

それとさ、今日、あの公園を後にした時にちょっと気になったんだけど、慶一君、ずいぶん晴れ晴れとしたような顔してたよね？

それだけがちょっとだけ気になってたんだよねー。

いつかその顔の意味を教えてくれたらいいなって思ったりして。

話は変わるけど、明日から桜藤祭の準備も始まるけどさ、これからも一緒に頑張っていこうねー。

色々手伝い、期待してるよー？

最後に、今日から始まる深夜アニメで面白いのがあるから、それをちぇきしてねー。

というメールだったのだが、俺自身気付いていなかったあの後の晴れ晴れとした表情って奴はきっと、俺自身の心残りと後悔を清算できた事に対するものだったのかもしれないな、と思う俺だった。

明日から、桜藤祭に向けての準備が本格的に始まる。

それを前にして俺は、あの分厚い資料に目を通しつつ、改めて気合を入れなおすのだった。